

西洋中世学会 第 12 回大会 (2020 年)

自由論題報告および問題提起 要旨

自由論題報告

1 関沢和泉 Izumi SEKIZAWA

プリスキアヌスの《声 vox》——それはドナトゥスだけがいた文法理論の砂漠に響いたのか

中世における諸学問の歴史を記述しようとし、たとえば、ある学問において、ある特定の主題はいつ集中して扱われるようになり、いつ高度に発展したかたちへと練り上げられたのかを問うとする。中世に対してこのような問いを投げかけた場合、ある時代以降にしか（実質的に／体系的に）アクセスできなかった権威ある著作 *auctoritas* が当該領域に存在するケースでは、そのような典拠となるような著作が果たした役割の重要性から、それが欠けていたそれ以前の時代は、必要なリソースがないのだから必然的に暗黒の時代であったはずだという描像に取り憑かれることになる。アリストテレスのこれこれの著作の翻訳以前、等々。他方、さまざまな間接的なリソースを通じて、断片的に伝えられていた学説というものもある。利用できるリソースの有無により時代を区分しようとする試みは、このようにして困難に直面する。

ラテン語世界の文法学において、そうした時代区分の要石として扱われてきたのは、プリスキアヌスである。彼はコンスタンティノポリスで活躍するなかで、六世紀に『文法学綱要』（より本来のタイトルに近いのは『（プリスキアヌスの）学』であるとされる）と今日呼ばれる、用語の詳細な定義と構文論を含む 18 巻から成る大著を記した。だが、この『文法学綱要』はアルクイヌスの時代以降、とくに 9 世紀に入るまでは、ほとんど読まれることがなかった。ゆえに、それまでの間はドナトゥスが書いたより簡潔な文法学書で、中世ラテン語世界の文法学者たちは満足せざるを得なかったのだ、結果として、それまでの間の発展は限定されたものとなった……といった筋書きである。

ところで、《vox》に関連した 12 世紀の議論において、アリストテレスとプリスキアヌスの（再）導入（あるいは読み直し）が、《vox》とは何かを巡って、文法理論に関して一つの時代を区切ったということが近年詳しく追われるようになっていく。人間の言語活動の基礎にあると思われる《vox》とは一体何であるのか、という議論である。それは古代に遡る主題であるとはいえ、プリスキアヌスの（再）導入が大きなきっかけであるとすれば、確かにそれはこの時代にそれまでとは独立して成立した議論だという方向に傾くだろう。

だが、《vox》を巡る議論は、簡潔ではあるが、ドナトゥスが残した文法書のうち、より長い著作である大文法学の冒頭部分にも含まれる。そして、この箇所に対する註釈は、多くはないものの、プリスキアヌスが読まれ註釈が増えていく以前に幾つか存在している。

両者の時代の間で、テキスト（ドナトゥスへの註釈）がどのように読まれ続けたか、その歴史的な系譜を追うことは今のところ難しい。しかし両者の議論の構造を比較することは出来る。本報告では、プリスキアヌス（再）導入以前のドナトゥスへの註解とプリスキアヌスの（再）導入後の《vox》に関する議論がどのように異なりつつ重なりあっているか（あるいはその逆）を構造的に追い、プリスキアヌスの《vox》が、どのような背景に響いたかを見ることで、以上のような時代区分の問題を、文法学の歴史において考察する。

2 西川雄太 Yuta NISHIKAWA

『農夫ピアズ』における主題聖句と例話—説教術書との関連性—

ウィリアム・ラングランドが 1370 年代から 90 年代にかけて中英語で著した『農夫ピアズ』*Piers Plowman* は、社会的正義や信仰と道徳における健全さなどを主題として取り上げ、また 3 度にわたる改訂によって激動の社会・宗教情勢を反映した夢物語形式の宗教寓意詩である（本発表では C テクストを使用する）。この詩には同時代の中英語作品の中でも傑出した数のラテン語引用句が挿入されており、特にそれが持つ教化的役割に着目して、活版印刷術以前にキリスト教的言説を普及する「マス・メディア」として機能していた説教との関連性がしばしば指摘されてきた。例えば第 1、5、12 章の形式・内容面における同時代説教との類似性が論じられているが、主題聖句 *thema* や例話 *exemplum* という説教構成要素に関して、説教執筆マニュアルである「説教術書」*artes praedicandi* の記述を具に検証した例はまだない。本発表では、形式・内容面も踏まえつつ、これら 2 つの説教構成要素が詩中で果たす修辞学的機能に光を当てる。

まず、ベイスヴォーンのロバート Robert of Basevorn の『説教形式』*Forma praedicandi* (1322 年頃) の記述を整理することから始める。中世後期に主流であった「新説教形式」*sermo modernus* は、主題聖句と呼ばれる聖書からとられた一行を入念かつ詳細に論じたものである。ベイスヴォーンによると、主題聖句は説教の始めに提示され、それ以降の説教展開の基盤となるものであり、聖書から引用されるべきものである (*FP*, Ch. 15–23)。また、例話は聴衆である平信徒にとって効果的かつ理解しやすいものであり、聖書による権威付けが必要とされる (*FP*, Ch. 49) ため、説教者と聴衆（平信徒）をつなぐ媒体として機能している。

次にこれら 2 つの説教構成要素が果たす修辞学的機能について、先行研究では取り上げられていない『農夫ピアズ』第 10 章を検討する。この章は、詩全体を大きく 2 つに分けた際の後半部冒頭に当たり、またこの詩の中核をなす神学議論を展開する夢旅（第 10～14 章）の導入部分でもある。主人公 Will はキリスト者としての理想の生活の 1 つである「善行」(Do-Well) についての見解を二人のフランシスコ会士に尋ねる。しかし、彼らの浅はかな回答に怒りを覚え、「正しき者は日に七度罪を犯す」‘*Sepcies in die cadit iustus*’ (Prov. 24.16; cf. Ps. 118.164) という主題聖句を提示し、当時のスコラ学的討論用語 (*Contra* と *Ergo*) を用いて三段論法的に反論する。これに対し、フランシスコ会士は「荒波に揉まれる小舟」の例話を持ち出し、Will が提示した主題聖句について例証する。

最後に、この章で用いられる主題聖句と例話に関して、同時代の教訓文学や説教も参照しつつ、形式・内容面において正当なものであることを示唆する。そしてこれら 2 つの説教構成要素が、重要なパッセージの冒頭に配置されることによって、ラングランド自身が強調するキリスト教的教えを読者に伝えるための「媒体」(*medium*)としての機能を果たしていることを明らかにしたい。

3 菊地智 Satoshi KIKUCHI

ヤン・ファン・レーウェンにおける「キリストの最内奥」の概念

本報告は、14 世紀にブラバントで活動した神秘思想家ヤン・ファン・レーウェン (Jan van Leeuwen 1378 年没) の思想と、その成立背景を取り上げる。彼は、ブリュッセル近郊のフルー

ネンダール（Groenendaal）に14世紀半ばに創設された律修参事会修道院に属する在俗信徒で、調理その他の雑事に携わり修道院の物質的生活を支える傍ら、神秘主義的な内容の論述作品を中世オランダ語で多数著している。壮年期に修道院に加わるまで読み書きを習ったことはなかったが、修道院創設者の一人、中世オランダ語圏を代表する神秘思想家ヤン・ファン・リューズブルク（129-1318年）に師事して、学問を修めたとされる。

ファン・レーウェンは、ドイツのドミニコ会神学者マイスター・エックハルト（1260年頃-1328年）に対する批判者として、中世思想研究の分野で取り上げられることが多い。フルーネンダール修道院の著作家たち、ならびに、フルーネンダール修道院の影響下にオランダで始められた敬虔運動デヴォーチオ・モデルナの著作家たちは、中には例外もあるが、教会からその教説が異端断罪を受けたエックハルトの思想に対して概ね非好意的であった。中でも、エックハルトを名指して「悪魔的人間」と呼んだファン・レーウェンは、非難の先鋒にあった人物として知られている。

しかし、そうしたエックハルト批判の背景にもなっている彼の思想全体、もしくは彼の思想を成立させた霊性史的背景については、まだ十分に解明されていない。本報告では、彼の思想とその背景に関して次の三点を示し、霊性史上におけるファン・レーウェンの独自の貢献について述べたい。

（1）彼の思想の中心にあるのはキリストの人性（人間本性）の内面的理解であること。ファン・レーウェンによれば、キリスト信者は、精神の内部に備わる「キリストの最内奥」を介してキリストの受難の意味を真に理解し、その人性に接続し、さらに、子の位格において人性と一つとなっている神性に与ることができる。

（2）こうした考えに基づいて、ファン・レーウェンはエックハルトを批判していること。後者が誤った教義を唱えたのは、「キリストの最内奥」を欠き、あらわな神性のみを見ようとしたためとのことである。この際ファン・レーウェンは、エックハルトと、「自由心霊派」と呼ばれる汎神論的、神秘主義的傾向を持つ異端との密接な思想的かかわりを見出している。彼のエックハルト批判に関しては、この文脈で見なくてはならない。

（3）彼の思想の背景には、14世紀にかけて熟してきた民衆の霊的矜持があること。中世を通じてヨーロッパでは、ラテン語教育を受けた知的エリートである聖職者・修道士たちが、神秘思想の主な書き手であったが、13世紀頃から、ラテン語に代わり民衆の言語を用いて、神秘体験を記述する著作家たちが各地に現れるようになる。彼らの多くは、ベギンをはじめ、在俗信徒のまま使徒的清貧の理想に則った生活を実践する敬虔運動の担い手であった。そうした中でファン・レーウェンは、無学な出自の在俗信徒であっても、最高の神的真理に到達可能であることを、在俗信徒自身の立場から実名で主張した最初期の著作家の一人である。その際彼は、「キリストの最内奥」を介して、学問や聖性の程度にかかわらず、人は神的真理に到達することができる」と述べている。知的エリートの聖職者・修道士に対抗する民衆の霊的矜持を表明する際にファン・レーウェンが依拠したのも、キリストの人性の内面的理解であった。

4 佐藤公美 Hitomi SATO

14 世紀後半マルケにおける反乱の財政—八聖人戦争期前後のフェルモを中心に—

1370 年代後半のイタリア半島で戦われた八聖人戦争は、半島内における一領域国家としての教会国家とフィレンツェの対立の一つの帰結であった。この時、ゲルフィ陣営の中心であったフィレンツェが、ギベッリーニ陣営を率いたミラノのヴィスコンティ家と同盟を結び、領域国家としての利害がゲルフィとギベッリーニの対抗図式を超えたことを如実に示した。八聖人戦争期はこの意味において、広域的党派によるゆるやかな連携から諸領域国家間同盟への移行の画期であると言えよう。本報告はこのような展開に地域社会から焦点を当てることを目指す。報告者はこれまで、14 世紀のゲルフィとギベッリーニの広域党派とローカル社会のミクロ党派の結合をヴィスコンティ国家下の地域社会において分析してきたが、このようなミクロとマクロの結合を前提とすれば、八聖人戦争期の転換もまた、ローカルな現実からその意義をより立体的に検討できると考える。

注目すべきは、八聖人戦争では一領域国家を超えてミラノ、フィレンツェ、そしてナポリ王国をも巻き込んだ半島スケールの動向が、教会国家領域内外の都市とコンタードの共同体や領主支配のローカスケールの動態と結びつき、一般にはフィレンツェによる煽動の結果とされる反乱現象に結実していたという事実である。しかし 14 世紀後半の教会国家領では、八聖人戦争に先立ってしばしば反乱が生じており、これらを一連の動きとして解釈することも可能である。であるとすればフィレンツェ・ミラノ同盟と教皇庁の対立のみに原因を帰するのではなく、地域の現実において反乱を理解する必要があるが、これまでの研究では、14 世紀後半の教会国家と都市コムーネそれぞれの統治機構の相互関係や個別的な実際の動きについて不明な点が多く、それらが反乱に際してどのように機能し、その原因や帰結とどう結びついていたのかについての詳細な検討はなされてこなかった。

本報告は、都市フェルモとそのコンタード、及びフェルモ周辺地域を分析対象とし、特に八聖人戦争期前後の反乱と財政の関わりに注目して検討する。この時期反逆者とされた人物に対する最も一般的な対応は、財産の没収と追放であった。それが具体的にどのように実行され、教会国家と都市コムーネ・フェルモがそれぞれどのように関わり、いかなる帰結をもたらしたのかを、フェルモ国立古文書館所蔵史料を中心に検討し明らかにする。フェルモを含むマルケ地方は、無数の中小シニョーレ達の存在によって都市を中心としたコンタードの統合性を著しく欠いていただけでなく、都市とコンタードを超えた領主間同盟の発達した網の目を持っていた。本報告ではこのような地域において、反乱者の追放と財産の没収と売却が教皇庁と都市コムーネの協力の下に行われ、領域構造を変動させ、人と財産の移動と淘汰をもたらしたことが検討されるであろう。そしてこのような現地の動きを踏まえ、ローカルなスケールと半島レベルのスケールを統合した中世後期イタリア半島政治史の一端が展望される。

5 工藤義信 Yoshinobu KUDO

中英語文学ミセラニー写本にみる読者の関心、イデオロギー形成、そして教訓的テキストの機能—Cambridge, Magdalene College, Pepys MS 2030 および Cambridge University Library MS Ee.2.15 の新考察

15 世紀中葉に成立したピーター・イドリーによる教訓的英語詩『息子への教え』は、従来あまり注目されることはなかったものの、中世後期イングランドにおける英語文学の受容の実態を知るうえで重要な作品である。アルベルターノ・ダ・ブレシアによるラテン語の 2 作品を材源とした第一部と、ロバート・マニングによる英語作品『罪を論ず』をもとにした第二部は互いに異なるジャンルに属するテキストであり、これまではユニークではあるものの一貫性のない組み合わせと捉えられてきた。本報告では、中世後期に制作された英語の写本の支配的な形態のひとつである、多様なジャンルの作品を収録した「ミセラニー」という形態に着目することで、第一部と第二部の組み合わせが当時の写本文化の中で持っていた意義について考察する。本報告は、1475–1500 年頃制作されたとされる Cambridge, Magdalene College, Pepys MS 2030 および Cambridge, CUL MS Ee.2.15 の 2 写本に焦点を当てる。これらの 2 写本が 1 冊の本を形成していた可能性が、ごく最近 Joni Henry によって指摘されている（Henry にならい、この 2 写本を合わせて The Fisher Miscellany とする）。本報告はこの新たな知見に加え、The Fisher Miscellany の制作環境に関する基本的な考察を踏まえた上で、ミセラニー写本の中でのイドリー作品の位置づけを吟味し、本作品の二部構成が中世後期の写本文化に固有の文脈の中で重要な機能を有していたことを示す。

まず、The Fisher Miscellany に収録されたテキストの組み合わせに着目し、その組み合わせの中でイドリーの作品が有していた機能について考察する。The Fisher Miscellany の同定によって、これまで知られていたよりも多くのテキストがイドリーの作品とともに編纂されていた可能性が高くなった。とくにイドリーが、チョーサー、ガワー、リドゲイトといった 14・15 世紀イングランドの著名な詩人による英語作品と並置されていたテキストであることを示唆しており、注目に値する。こうした文学的テキストとの組み合わせは、イドリーのテキストを含む他のミセラニー写本における組み合わせとも類似している。これらの分析から、イドリーの二部構成は、英語ミセラニー写本の制作の要請に合致したものであることを論ずる。

続いて、テキストの組み合わせから、編纂に携わった者のリーディングへの関心がいかに読み出せるかということと、このようなテキストの組み合わせが結果として読者に対しどのようなアイデンティティ形成、イデオロギー形成を促すかについて論ずる。The Fisher Miscellany の制作時の状態を推定することが困難である以上、作品の配列についての考察には限界があるだけでなく、現存作品以外にも収録作品があった可能性も排除できない。それでも、現在収録されているテキストの組み合わせを吟味することによって、テキストの編纂に携わった者の関心が見えてくること、またこのミセラニー写本が全体としてどのような想定読者を形成しているかを分析することが可能であることを示す。さらに、The Fisher Miscellany の当初の所有者が商人であった可能性が高いことに注意を向け、テキストによる想定読者の形成と実際の読者との関係へと考察を進める。

問題提起

津田拓郎 Takuro TSUDA

若者の西洋中世離れ

—通俗的西洋中世像と中等教育における西洋前近代の取り扱い—

本報告は、多くの若手研究者や一般層が急速に「西洋中世」への関心を失ってしまっている現状を各種データに基づいて明確化したうえで、こうした状況をもたらした要因の一つとして、中世研究者と一般層の中世理解の乖離を取り上げる。報告内容は主として報告者の専門分野である歴史学の領域に関するものとなるが、この問題は西洋中世学一般に関わるものであり、西洋中世学会全体が考えていくべきものであろう。

近年、わが国中世研究者が国際的な舞台で活躍する事例は珍しいものではなくなっている。邦語のみならず欧文中で論文・研究書を刊行し、欧米の学会で現地の研究者と対等な立場で議論を交わす研究者は、中世学会の構成員のなかにも多数見られる。

だが、日本の中世研究の未来は明るいものとは思えない。特に問題があるのは、若い世代で西洋中世研究を志す者の数が大幅に減少している点にある。若手研究者の中世離れは、西洋中世に関する学会報告や論文の数が10年ほどで顕著に低下していることから明らかである。だが、中堅～ベテラン層の中世研究者の活発な活動に覆い隠されてか、こうした状況はすべての中世研究者に明確に認識されてはいないように思われる。

こうした状況が生まれている背景には何があるのだろうか。周知のごとく、中世研究者たちの多くは、自身の世界的な研究成果を一般層に伝えるための努力を積極的に行っている。市民講座や公開講座、各種概説書や啓蒙書などがその代表だろう。だが、こうした啓蒙活動に触れている市民たちは、すでに西洋中世に高い関心を持っている層であり、日本に暮らす人々全体のなかではごく少数に過ぎない。報告者が問題視しているのは、日本の一般層における西洋中世理解、より正確に言えば西洋中世に対する誤解である。特に本報告では「中世＝暗黒時代」という歴史像の徹底的な否定がもたらした「中世イメージの空白化」という問題を取り上げたい。暗黒時代否定論者の意図とは全く異なる形で、ロマン主義的な中世ヨーロッパ像(中世と近世・近代の混同)だけが残ることとなり、一般層における中世ヨーロッパイメージは研究者らが明らかにしている中世ヨーロッパの実像とは大きく異なるものとなってしまっている。本報告ではこうした現状を具体的な事例とともに明らかにしていきたい。

特に本報告が重視したいのは、一般層における誤解が生まれている要因の一つである、学校教育における西洋中世の取り扱いについてである。2022年度からは高等学校の教育において世界史が必修から外され、フランス革命以降のみを扱う「歴史総合」が新たな必修科目として導入されることが決定している。中世研究者が世界の研究者を相手に最先端の議論をしているあいだに、国内の教育の世界において、西洋中世は高校生全員が学ぶべき分野ではないという決定が下されたのである。

前近代を一切扱わない歴史総合の必修化が撤回される可能性はほぼ皆無であり、西洋中世に残された最後の砦となるのが、中学校における歴史教育である。だが、本学会構成員のうちのどれだけの者が現行の中学校の歴史教科書の内容を知っているだろうか。本報告では、今後大多数の一般層が西洋中世に触れる最後の機会となる中学歴史教科書の内容を取り上げ、通俗的中世イメージが生まれる背景について考えていきたい。

なお、本報告の枠内では上述の問題を解決するための方策を具体的に提示することは困難であり、本報告は問題の所在を明確にするための出発点という位置づけとなる。本報告がこの問題についての幅広い議論を生み出すための呼び水となることを大いに期待するものである。